

第26回 全国女性教職員 学習交流集会in鳥根

2016年10月8日12:00 北九州より参加した5人の女性教職員は、鳥根県松江市JR松江駅にいた。出雲そばを食べ、いざ、会場へ！松江は水景が美しい、しっとり城下町。茶大名といわれた松江藩主・松平不昧(ふまい)の影響で和菓子と抹茶の文化が浸透している街。というわけで、一抹茶と和菓子のおもてなし和の伝統文化を満喫させてもらった学習交流会だった。

現地速報のタイトルは「縁～えにし～」。祖先が築いてきた日本の心と知恵。決していいことばかりではない人間の営みが織りなしてきた歴史を、今を生きている私たちが引き継ぐ。そして、次の人へつなぐ。横へ縦へつないでいく原動力は、まさしく「縁」だ。記念講演では安次嶺雪音さん(沖縄県東村高江在住)の話を聞く。この「縁」をどう横へ縦へつないでいくかが、私たち教職員の使命だと思った。一何を感じ何を誰に伝えていくか。

教員はいい。伝えたいと思えば、目の前に大勢の聴衆がいる。そう、子どもたちだ。大切に大切に自分の言葉で、自分の感じたままに、どんな歴史を歩もうとしているのか、どんな歴史をつくっていくのか子どもたちと一緒に考え、つないでいこう。

オープニング



安来節(演舞は女子中高生)とヤマタノオロチ(原発・戦争法)退治の熱演・合唱



全体会記念公演：安次嶺雪音さん

(「ヘリパッドいらない」住民の会)

【速報 縁～えにし～No.3より】



オスプレイが飛ぶと、ものすごく大きな音がするだけでなく、低周波で身体に大きな負担です。学者の人たちは、自然豊かなやんばるの森で生きている生き物たちは、生きることはできても、繁殖はできないと言います。

今年になってオスプレイの飛び方が変わり、昼間だけでなく夜11時まで低空を飛ぶことが1ヶ月続きました。眠られなくて、住むことができなくなる不安が現実になりました。

私たちはいのちと時間を削って、体を張って非暴力で戦っています。けれど、沖縄の人が力尽きたら、日本は戦争へと進んでいきます。「これはおかしい」とみんなが声をあげ、戦争のない平和な未来を子どもたちに手渡ししましょう。(講演記録)



私たちはいのちと時間を削って、体を張って非暴力で戦っています。けれど、沖縄の人が力尽きたら、日本は戦争へと進んでいきます。

「これはおかしい」とみんなが声をあげ、戦争のない平和な未来を子どもたちに手渡ししましょう。(講演記録)

「私の住んでいる東村高江は、生物多様性のとても美しい村です。」講演はこの言葉から始まりました。やんばるの森の数々の動植物が映し出されます。

「ここでしか生きていくことのできない希少な動植物が、たくさん暮らしています。ここで静かに心豊かに暮らしたい。のびのびと子育てがしたい。この豊かな自然を子どもたちに残したい。わたしはここが大好きです。」

ドキュメンタリー映画「標的の村」(三上知恵監督)をご覧になった方は、安次嶺さんのこの思いが、そして、ヘリパッド建設に反対している抗議行動がおわかりのことと思います。政府はだれの見方なのでしょう。国は誰のために何のためにあるのでしょうか。沖縄、福島、武装した自衛隊の駆けつけ警護、そして、戦争ができる国を下支えできるようにするための教育への変換。「同じ過ちは繰り返しません。戦場に教えるは送りません。」戦争を経験した先輩教師の方々の悔恨の念と決意を引き継ぎ、平和な未来へとつなぐために、安次嶺さんの「折れない心」を私たちも持つときだと思いました。(佐藤)



基礎講座「学ぶ喜び、教える喜びのある学校に」

佐久間 亜紀さん(慶応義塾大学教職課程センター教授)

学力の定義にはいろいろあり、学力をとらえるポイントを次のように話されました。

○「学力とは、知っている知識の量ではなく、生活の中で生きて働く力のこと。」

○OECD や文科省が唱道する学力観は、日本の民間教育運動が追及してきた学力観と共通している。

○民間教育との相違点は、「子どもが何を求めているか」ではなく、「社会がどんな子どもを必要としているか」という視点である。そして、国際競争の中で国が、東京が、大企業が勝つ残りのための学力観を前提としている・・・学力テスト 1 位の秋田県の子どもたちは幸せだろうか。秋田県内一村以外全自治体が「消滅可能性都市」、自殺率 1 位である。「村を捨てる学力」ではなく、地域創生の教育が今まで以上に求められている。

○今、学校には、相容れない学力観が降りてきている。新自由主義(競争至上主義)への対応として英語教育、テスト政策、アクティブラーニング、そして、政界(新保守主義)が日の丸君が代、道徳教育、体育(武道)、「日本を取り戻す！」を叫び、従順な教師・子どもにしようとしている。

○教室は社会の縮図・・・教職員は今こそ、教室に映った社会に目を向けよう。どんな社会を実現したいかを考えよう。(学級で多数決を乱用していないか、強く速いのがいいことか、長いものには巻かれろになっていないか・・・)

では、実際にどうしたらよいか。「つぶやくことのできる教室」や「学ぶ必然性のある課題から入る授業」「子どもの意欲を引き出すしかけ」をと、実践例を挙げながら「学ぶ喜びのあふれる教室」をつくらうと熱く語られました。

最後に、大切なポイントとして、

○子どもが学ぶ・・・答えではなく、探求の方法を学び、生活のなかに生かしていけること。

○子どもが学ぶ場をつくること・・・子どもが参加していく教室・地域・社会をつくること。

○教師自身がどんな教室を、地域を、社会をつくりたいかの考え、ビジョンをもつこと。「自分自身の、教師としての思いや未来への希望を、もう一度問い直し語り合おう」と結ばれました。

今、学校現場には、いろいろなことが押し付けられています。おかしいなと思いつつも流されそうになりますが、視野を広く持って学力とは何かを問い続けながら、子どもが学ぶ喜びの持てる教室づくり、授業実践をしていきたいと思います。(高津)

特別支援教育は今

佐田千枝子(西門司小)

初めて参加して、パワフルなおばちゃん(私もそうです)が達のジョークを交えた出し物に人間の幅をたっぶり感じました。分科会では、支援教育が高校にまで発展していることに驚きと社会情勢の変化を感じました。以前は遊びや家の手伝いなどの労働で自然に身につけていた思考力、手先の力、人と共同する力、体力などが、今は全てと言っていいほどゲームに奪われてしまっている中で「どんな学習内容を提示していくか、今のカリキュラムで果たして良いのか」という課題を、強く感じました。



しゃべり場

中川喜久子(書記局)

埼玉県川口市の労働安全衛生委員会を中心にした「働きやすい職場」づくり、三児の母として育児や介護に追われながらの「働き方の工夫」の二本のリード発言がありました。長時間過密労働が蔓延する職場にあって、外郭的には委員会との交渉等も必要だし、内部としては「働き方の工夫」「内容の取捨選択」も大いに必要だと改めて感じました。さらに、職場で相談役としての組合女性部の役割！これが大事です。周りは待っています。



夕食交流会に参加して

現地実行委員による「トーンチャイム」で始まった夕食交流会。島根の郷土料理である「出雲そば」、職人さん自らの和菓子と野点のふるまい、味もさることながら持って帰りたいと思うほどのメインの御重の美しさなど、気遣いと暖かさを感じた楽しい会でした。

毎年恒例のブロックの出し物はどこも工夫されたもので、特に、近畿ブロックの「大喜利で世相を切る！」は学校の文化活動発表会で

♪米軍基地は ♪いない ♪オスプレイも ♪いない
♪ウーマンパワーで実現だ ♪あたらしい未来がやってくる

替え歌を佐藤女性部長のリーダーシップのもと、各県ごとに歌詞を考え、披露しました。

大人数で、ステージが女性のパワーに耐えられず、壊れるというハプニングもありました(笑)。「だんだん」という言葉も覚え福岡に帰ってきました。(荒木)

来年は滋賀です。近畿パワーを浴びに行きましょう！